The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	道の途中で ： 島唄
Author(s)	大貫, 惇睦
Citation	大阪大学低温センターだより. 2018, 168, p. 36-37
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/70643
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

道の途中で　–島唄–

琉球大学理学部　　大貫 惇睦＊

大阪大学に勤務していた頃、日曜日は沖縄の音楽を聞きながら論文を書いていたことが多かったと思います。ゆったりとしたメロディーが耳に心地良く、勉強に集中できました。私の年代の誰もが知っている沖縄の島唄は、森山良子さんが歌う「さとうきび畑」や「涙そうそう」でしょうか。「さとうきび畑」は戦後の米国占領下の沖縄を訪れた作詞 作曲家の寺島尚彦さんの作品です。最も親しまれている島唄は「芭蕉布」でしょう。今や芭蕉布は高価でとても買えませんが、沖縄北部で今も生産されています。芭蕉は琉球大学の校章になっています。「芭蕉布」を聞いていると、首里の古城が登場します。明治の頃の首里の写真を見ると、樹木がうっそうと繁り、城壁に450年続いた琉球王国がしのばれます。上納された浅地、紺地の芭蕉布を献げて歩む役人の姿、石畳の坂道、様々な情景が哀惜とともに目に浮かんできます。また、浅地、紺地と言うと「西武門」の男女のやり取りの唄も思い出されます。

ところで食べるバナナの芭蕉と、芭蕉布の糸芭蕉は良く似ていて、素人の私には区別はできません。藍の草を栽培して藍をしぼり、糸芭蕉から芭蕉糸をつむいで藍染めして芭蕉布がつくられます。また、沖縄のさとうきびはススキをひとまわりかふたまわり大きく、太くしたものです。ススキの穂はたれ下がりますが、さとうきびの穂はスーと伸びています。違いはそんなところかと思っていたら、さとうきびと同じくらいの大きさで穂がたれ下がらないススキが我が家の道路向かいにあるのです。あるときその茎を切ってかじったのですが、さとうきびのような甘さは全くありませんでした。

数年前、近くのショッピングセンターに普天間かおりさんが来るというので出かけました。力強いストレートな歌い方に特徴のある歌手です。CDカバーの写真は神経質そうなほっそりとした横顔でした。沖縄の有名な歌手なのでさぞかし混むだろうと思い、家内と私は公演の30 分前に着きました。50人分くらいのイスがいつも用意されていますが、観客はまだ1～2人くらいでした。ステージには40歳くらいのふっくらとした顔の体格の良い女性が、音の調整をしていました。普天間かおりさんの前座の方かなあと思っていたら、何とその方がご本人でした。およそ40分間歌を聞きながら、力強いストレートな歌声をすっかり納得しました。

話は変わりますが、昨年琉球大の修士を終えた、研究室のもと学生さんの結婚式に出席しました。沖縄での結婚式は私には初めてのことです。那覇のホテルでの普通の結婚式です。早く着いたので会場を見渡すと、部屋の広さの割にテーブルの数が多いかなと思いましたが、本土での普通の結婚式と変わることはありません。ただし、このテーブルの広さでは本土では4人のところが8人が座り、いつの間にか出席者で部屋はいっぱいになりました。BEGIN（ビギン）の元気の良い歌声とともに新郎 新婦が入場し、結婚式が始まりました。改めて出席者表をながめると、新郎 新婦の近くには勤

＊大阪大学名誉教授

務先の方々も居ますが、主として親族でした。私を含めた先生方や研究室のもと学生さん達は末席なのです。末席の中央の私のテーブルの後ろが舞台でした。オープニングは琉球舞踊の「かぎやで風」を2人の女性が目の前で演じられました。お2人は新郎の従姉妹とのことです。通常の舞踊というよりは、願いや思いを指先や爪先に伝えるという表現に近いものでした。豊かな黒い髪と気品ある清楚なたたずまいも印象的でした。2人の女性は昔の朝ドラの「おはなはん」の樫山文枝さんやつい最近終えた土曜時代ドラマ「みをつくし料理帖」の黒木華さんとは対照的な目鼻立ちで、何と言っても目に力があるのです。

その後、祝詞もあったかと思うのですが、催し物の音や会場にあふれんばかりの出席者のざわめきで、末席（?）の私はむしろ舞台を見ながら回転テーブルの和食、中華、洋食と次々に出てくる料理を食べるのに忙しく、あっという間に時は経ってゆきました。終わり頃に、BEGINの「オジー自慢のオリオンビール」の歌が流れました。すると会場の出席者全員が、歌の「新築祝いであっり乾杯」「…乾杯」が7〜8回続くたびごとに、目の前の淑女は二の腕をあらわにこぶしを高々と天に向かって挙げ、紳士の私もいつの間にかそれに習い、会場は一体感に包まれるのでした。その高揚感の中でKiroro（キロロ）の澄んだ歌声を聞きながら、新郎・新婦の両親とその両親への花束贈呈です。車イスの4 人のオバーが嬉しそうにもらうのも印象的でした。オジーが一人も居ないのも沖縄らしいのかなあと思いました。

沖縄は観光地なので、若い民謡歌手が大勢育っています。毎月のように出かける那覇の桜坂劇場（映画館）が、ときどきコンサート会場になります。各地に島唄があり、その大会にチャレンジする若者が土台になっています。BEGIN誕生の映画「恋しくて」もかつて桜坂劇場で見ました。

島唄は、三線にのってもの悲しく朴とつに語るがごとくくり返しくり返し歌ってゆくものが多いようです。本土の五七調とは異なり、八八八六の句から成り立っています。数年前に復帰40周年を記念して「てぃんさぐぬ花」が県民愛唱歌に指定されました。「てんさぐ（ホウセンカ）の花」のことですが、親の教えを心に染めなさいと切々と歌うこの歌は、私の大好きな島唄の一つです。

てぃんさぐぬ花や
爪先（ちみさち）に染（す）みてぃ
親（うや）ぬゆしぐとぅや
肝（ちむ）に染（す）みり

三線